みのわだより

令和６年３月発行　４０５号

verde

「ｖｅｒｄｅ」とは、ポルトガル語で「緑の」という意味です。

ベルジ箕輪

ベルジ株式会社　有料老人ホーム　ベルジ箕輪

発行責任者　総支配人　守田　昌史

支配人　高木　正幸

〒370-3104 群馬県高崎市箕郷町上芝 839-4

Tel 027-371-6610　/　Fax027-371-6613

E - mail　minowa@e-verde.co.jp

URL　http://www.e-verde.co.jp

（ホームページにてブログも更新しております。そちらも是非ご覧ください。）

２月の出来事

節分

２月といえば節分。職員が鬼に扮装し「鬼は外！」大きな声が響き、皆さまに漂う邪鬼をねこそぎ払いました。鬼のコスチュームで職員が現れると「おっ！鬼か」と目に力の入る皆さま「今日は節分です。皆さま悪い鬼を払いましょう」と職員が新聞紙を丸めた豆を手渡すと「よし！」と豆をいくつも抱え鬼にジリジリと歩み寄り「この！」と一投。それをきっかけに次から次へと豆が鬼を襲います。「参った～」と倒れこむ鬼。豆まきの本来は心に住む鬼を追い払う禊のような意味があるそう。魔が差したという言葉がありますが、人間誰しも間違った行動をしてしまうことがあるかも知れません。そんな自分の身に潜む悪いものを追い払う、そしてもう大丈夫と安堵する豆撒き。節分の鬼とはそういう心の穢れのようなモノ、目には見えない煩悩を「鬼」としてカタチを与え、退治することで浄化する。節分が世界で流行したなら世界はもっと平和に出来るのかも。

バレンタイン

バレンタインには悲しい由来があります。ローマ帝国皇帝が兵士の士気が下がるという理由で、兵士たちの婚姻を禁止しました。キリスト教の司祭であるウァレンティヌス（バレンタイン）は、婚姻を禁止されて悲しむ兵士たちを憐れみ、内緒で結婚式を行っていたそう、それを知り怒った皇帝はウァレンティヌスを亡き者にします。その日が２月１４日だったことから彼を愛の守護聖神「聖バレンタイン」として祀るようになったそうです。では、チョコレートの日となったのは、お菓子メーカーが販売促進の為の戦略といわれており、海外の愛の日「聖バレンタイン」からヒントを得てチョコを贈る文化をつくったといわれています。男尊女卑な日本で女性が男性に告白するという、真新しい文化に、華やかなお菓子のギフトが当時どれだけ斬新であったか尊像するだけでドキドキします。お菓子も売れ、平和で幸福なだけの革命的文化。世の中が平和であろうとする文化であれば、拡散させることに協力は惜しみません。小さな努力を侮るなかれ。

お汁粉

あったかくて甘い冬の御馳走お汁粉をいただきました。幼子の頬っぺたのような、柔らかいおもちを頬張ると「美味しいね～」施設では誤嚥を予防するために、お餅は小さく、ちいさくしてから提供するので、気にしたことがなかったのですが、今年市販の切り餅を買った際にお餅の小ささにガッカリしました。家で搗いたお餅は手の平いっぱいの大きさで、一枚食べればお腹が満たされたものです。原材料の高騰による調整なのか、やはり誤嚥等の事故を予防する為なのか。
世知辛い問題があるのは重々承知ですが、昔より経済は栄えているはずなのに豊かになったようには思えない気がしてします。

春の足音

春の足音が聞こえ始めた小春日和、箕輪の皆さまに春を告げに来た花々を愛でに中庭へ。その日はバレンタインでもあったのでチョコレートのおやつを中庭でいただくことに。北風がいなくなり、静かな空を見上げ、まだ枯れ枝の桜に固く閉ざした桜の蕾を職員が指差し「今年も咲くね」口に放り込んだチョコレートを、ほっぺたの内側に隠し「ホントだ楽しみだね」と。朝、太陽が昇り雲一つない青空がカーテンを開け目に飛び込んでくる、朝日の眩しさに目を細め「太陽様ありがとうございます」と感謝の言葉を口にする。日々はほぼ同じことの繰り返し、けれど小さな花が咲いた、好物が出た。そうやって幸福なことを見つけて楽しむ。
皆さまに人生を教えてもらっています。

雛飾り

バレンタインが過ぎ、季節の飾りを着物の雛飾りに模様替え。梅の花を枯枝に咲かせ、色とりどりの着物を皆さまと飾りつけました。立春を過ぎると梅の花がほころび始め、温かい陽を感じる日が増え、春が訪れることを感じさせるようになります。やがて水仙の花が咲き、少し先には桃の花が咲き、枯れた草原に緑が芽吹き始める。皆さまが幼き頃、家には雛段が飾られていたでしょうね。箱からお雛様を出し、顔の埃を払い、その美しい顔を見て微笑まれたことでしょう。ひな祭りには雛段の前で晴れ着を着て写真も撮ったことでしょう。今は手間のかかることを好まない時代、少し寂しく思います。華やかな晴着で着飾った女子のままの皆さまの笑顔に、懐かしさと家族との想い出が脳裏に浮かび目頭が熱くなりました。

行事食（節分）

みのわ情報

2月3日は海苔巻きの日。1987年に全国海苔貝類漁業組合連合会という団体が制定しました。江戸時代から明治時代頃に大阪の花街で、商売繁盛・無病息災・家内円満を願って幸運巻きずしを食べるようになったのが始まったとされています。皆さまのお膳の可愛らしい鬼に「鬼が出た（笑）」箕輪の節分は皆さまの笑顔という豆で鬼退治成功です。

立春が過ぎ空気が変わったことを感じます。肌を吹き付ける風の柔らかさ、大地を照らす陽の暖かさ、冬と春を行ったり来たりする、お天気。庭のどこかから聞こえる野良猫の激しい鳴き声、季節を感じるのはお天気だけではなく、動物の変化からも感じることができます。箕輪では、お花が芽吹いたのを見つけ春の足音を聞き逃さぬよう耳をすませています。

中庭の花

編集後記

２月22日の猫の日。車を運転していると猫が飛び出してきて「危ない！」と冷っとしたことが何度かあります。昔、猫は家と外を自由に出入りするのが当たり前でした。ご近所の家を巡り、気に入ったところで昼寝をし、腹が減ったら家に帰ってくる。帰りが遅いと家の外に出て名を叫び、どこからともなくニャーと鳴き声が聞こえ、足元で身体をスリと擦り付ける。ご近所さんに出くわすと「何処どこで見かけましたよ」などと教えていただいたりもした。とことこと後をついてきたり、玄関先で犬のように帰りを待っていたり、頭を撫でてやると嬉しそうに目を細め、じゃれ遊んでいるのに急に夜の闇に飛び込んで行ったり、自由を謳歌しているのが猫だった。ペットフード協会の調べでは、猫の推計飼育頭数は2014年から８年連続で犬を上回っているそうです。猫は犬よりも餌代や医療費などもかかりにくいという経済的理由、散歩に行く手間がかからないといった人間の都合があるのでしょうが、猫の中にはYouTubeで何億円と稼ぐ猫もいて、今の時代は猫を飼うことで得られるのは癒しだけではないのかも知れませんね。春が近づいてくると庭先に見知らぬ猫が顔を出します。野良なのか飼い猫なのか「家は？」猫に訪ねます。当然返事などしないのですが、逃げずに触らせる人慣れした猫は飼い猫か捨て猫。「にゃー、にゃー」訴えるように鳴き声が聞こえ、「そこ？」近寄ろうとすると逃げ去ろうとする猫。「待ってて」慌ててキャットフードを取りに行き、そっと皿を置いて姿を隠す。時間をおき、空っぽになった皿を見て安堵。昔、近所のおじいちゃんおばあちゃんが紙に包んだお菓子をくれたように、腹が減ったものにご飯を与える心の豊かさ、物価上昇超円安の世知辛い時代でも忘れたくないなと思います。